

構築会
2002
だより 

構築会だより

目 次

会長挨拶	3
山村 勝保 (C66)	
専攻だより	4
土木工学専攻：松井 保 (C63)	
建築工学専攻：大野 義照 (A67)	
紙野桂人先生を偲んで	6
舟橋 國男 (A64)	
名誉教授の先生からのおたより	8
伊藤 富雄 槿木 亨	
五十嵐 定義 鈴木 計夫	
特集「変革の世紀にどう前向きに対応する」.....	13
鳥居 剛 (C72) 三好 庸隆 (A72)	
池上 俊郎 (A74) 北村 雅俊 (CM76)	
青木 伸一 (C81) 高森 博之 (C89)	
加藤 健太郎 (C96)	
卒業生だより	21
50周年：竹山 喬 (C52) 木村 康彦 (A52)	
40周年：榎木 通男 (C62)	
30周年：中木 秀一 (C72)	
20周年：磯寄 正哉 (C82)	
10周年：小野 潔 (C92)	
支部だより	27
大阪支部：辰谷 義明 (C80)	
愛知支部：降幡 達生 (C83)	
東京支部：大田 哲也 (C83)	
兵庫支部：本井 敏雄 (C75)	
広島支部：増田 伊知郎 (C80)	
2002年度役員会報告	32
事務局だより	35

ご挨拶

構築会会長 山村 勝保 (C66)



構築会・会員の皆さんにおかれましては、益々ご健勝の事と存じます。新世紀も2年目となり、多少なりとも将来の道筋が展望できるものと期待していましたが、我が世の春を謳歌していた米国経済が、ITバブル崩壊以降エンロン・ワールドコム等巨大企業の不正会計が顕在化し、株安・ドル安を招き世界経済が又もや混沌としてきており「景気底入れ」宣言を出したばかりの日本政府の足元もぐらついています。もっとも、企業倒産は後を絶たず、完全失業率は5.4% 375万人と高止まりしたままでは大不況感は拭えず、特に皆さんの活躍のフィールドである建設業界は今年度の公共事業の前年比削減10.7%の直撃に苦心慘憺している現状では「景気底入れ宣言」は何の意味も持ちません。

こと程左様に極めて困難な時代に、会長とゆう大役を仰せつかり、元来浅見短慮の身ですから無事職責を全う出来るか、はなはだ心もとない限りです。

戦後日本は戦災復興と外貨獲得のため、効率のよい規格大量生産を目指し、官僚主導で最適工業社会を造りあげてきたが、市場主義、情報化社会、多様化の現代に適応しきれなくなってきたと、堺屋太一氏はその著書で分析しています。当然最適工業社会を支えた日本システムは随所で制度疲労を起こし、いまや日本経済は複雑骨折の様相を呈しており、治療には不良債権処理・税制改革・規制緩和・金融政策等をうまく組み合わせた総合戦略が必要だとしていますが説得力のある話です。過去幾度となく繰り返してきた緊急経済対策が、財政赤字を膨らます結果しかもたらさなかったことに猛省した小泉総理は「構造改革なくして景気回復なし」として、構造改革・財政再建路線を頑強に推進、しかもここ1、2年は日本経済の集中調整期間とする方針との事ですから、景気回復への具体的な経済政策を期待する方がどだい無理な話かもしれません。

只、先般発表された都市再生本部の東京・大阪・名古屋の三大都市圏における17地区を構造改革特区として指定したことは、従来型の公共事業ではないといえ都市再生の起爆剤になり、資産デフレに苦しむ日本経済の再生に寄与するかも知れません。今更の話になりますが、慢性的な交通渋滞、環境問題、東海・南海地震対策等防災対策、都市再生の為に必要な公共事業は山積しています。少子高齢化と産業空洞化に苦しむ日本産業の生き延びる基本戦略としてバイオ・ナノテク・ヒトゲノム等ハイテク技術及びイノベーションが必要かもしれません、巨大化した日本経済の再生にはそれのみでは不可能です。いわゆるオールドエコノミーといわれる国内企業のインセンティブを高める施策も必要不可欠です。

昨今はドッグイヤーといわれる程、進歩も早く変化も激しい時代です。進歩・変化・情報の洪流に個人の才覚のみでの的確に対応するのは極めて難しい時代で、先輩・後輩・立場の異なる人等とのコミュニケーションで物の見方を補完する必要が出てきます。

土木工学専攻の近況

専攻長 松井 保 (C63)

昨年の夏に引き続き、今年の夏も体温に近い猛暑が続いている。地球温暖化も着実に進行しているのではないかと思わせるに十分な異常気象であります。この構築会だよりがお手元に届く頃には、暑さも峠を越えていることと存じます。本年は、3度目の土木工学専攻長(以前は教室主任、学科長)とともに、地球総合工学科長も合せて務めております。それぞれ最後のお役目と思われますので、ある意味で楽しみながら務めています。それでは、教室の近況をお届けいたします。

まず、この1年間の教室人事については、交通システム学領域を担当されておられました森康男先生が3月にめでたく停年退官され、大阪大学名誉教授になられました。5月24日には新阪急ホテルにおいて盛大に祝賀会が行われましたが、現在は福井工業大学工学部教授としてお元気に活躍されておられます。また、構造実験室の主として30数年務めてこられました西山六朗技官が定年退職されました。長年にわたり教室運営および技術の維持・伝承にご尽力いただきました。

つぎに、学生の就職状況については、前年の専攻長が就職担当となるシステムを昨年より採用いたしましたので、本年は松井繁之教授にご担当いただいております。4年次の70%強が大学院に進学いたしますので、卒業予定者は、修士約30名、学部約10名であります。7月末現在では、公務員以外の就職予定者(全体の約半数)の就職斡旋ができた状況にあります。不況な折、公務員指向が強まっているように感じられるが、順調に就職が進んでおりますのも、同窓各位のご尽力に負うところが多く、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。来年度もより一層のご支援・ご協力をお願いいたします。

さて、国立大学は、平成16年4月より非公務員型の独立行政法人に移行することが確実な状況になってきました。これは、時間の経過とともにかなり大きなパラダイムチェンジになり、大学がより主体的に産官学連携を推進するようになってくる(ならざるをえない?)と思われます。そのさきがけとして、今年は、“世界に通用する30大学”から少し変形した“21世紀COE”が進められています。地球総合工学系各専攻と国際公共政策研究科と協力して、文理融合型で「統合環境学創成連携機構」を確立すべく申請しております。これが採用されれば、大きなインパクトになると期待されます。また、工学研究科では、全国でも阪大と東大だけにしかないフロンティア研究機構(FRC)(5年間で50億円の予算)が設立され、産官学連携のNPOフロンティア・アソシエイツ(FRA)も付設して発足しています。また、かねてより懸案でありました産官学連携拠点の大坂大学中之島センターですが、全国で大阪と東京の2ヶ所に設置されるキャンパスイノベーションセンター(西日本の全大学が利用)と合築して建設されることになり、平成16年4月には供用されることになっています。

このように大きな変革の波が来つつある中、同窓各位には、教室の発展のため今後ますますご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げますとともに、ますますのご活躍を祈念いたします。

建築工学専攻の近況

専攻長 大野 義照 (A67)

建築工学専攻のこの1年間の近況をご報告申し上げます。

はじめに、名誉教授の紙野桂人先生のご逝去を謹んでご報告申し上げます。本年7月12日に心不全にてお亡くなりになりました。建築計画、都市計画の幅広い分野で輝かしい業績を上げられ、本学を定年退官されたあと帝塚山大学で教鞭をとられるとともに、各種委員会でご活躍のところでした。謹んでお悔やみ申し上げます。

次に専攻内の人事をご報告いたします。2001年4月に中川隆夫技官が建築構造学講座助手に昇任されました。2002年3月には甲津功夫教授が大阪工業大学から建築構造システム学領域担当として赴任されました。2002年6月には向井洋一助手が留学生担当講師に昇任されました。

学生につきましては、地球総合工学科第一期生が4年生になりました。この学年のみ入試は学科ごとに行われました。3年次の学生からは地球系4科目(船舶海洋、土木、建築、環境)は地球総合工学科として一括入試を受けています。所属科目は2年次の初めに志望と成績によって決まります。一年のうちに進路を決めればよいのですが、学科の定員数と志望学生数が一致しないので、学生は一年間気が抜けません。今年度の建築学科・建築工学専攻の学生数は、一年次学生は地球総合工学科の学生の1/4(40名)として、大学院生まで含めると学生総数は262名、その内21名が外国人留学生です。また企業に所属しながら入学している、いわゆる社会人博士後期課程の学生は5名、その他に研究生が7名在籍しています。

学生の進路ですが、今年度は他大学、本学の他専攻の志望者も含め33名が大学院博士前期課程への受験を希望しています。後期課程への希望者は5名です。

就職状況は今般の社会情勢を反映して厳しい状況にあります。しかし、先輩諸氏のご活躍ならびにご尽力のおかげで、今年も7月現在公務員希望者を除きほぼ全員内定をいただいております。その内訳はゼネコン8名、住宅産業2名、設計事務所4名、その他7名です。昨今は各企業の採用数が激減しているためかってのような推薦制度はなくなりつつあります。学生は複数の企業の入社試験を受けて、5社や6社の受験も普通になりつつあります。そして面接試験がいっそう重要になってきています。入学まで筆記試験のみで評価されてきた学生には厳しいものがあり、自己表現能力の開発などもゼミナールの中で指導していかなければならぬと感じています。

大学全体の状況としては、平成16年度からの国立大学の独立法人化が決まり、それに向けて各種の取り組みが行われ、大学においても書類が多くなりました。

工学部のほとんどの建物は1970年前後に建設されており、耐震改修が急がれています。平成17年までに改修工事を実施しないと予算がつかないということで、これから3年間ですべての改修を終える予定で動いています。しばらく騒々しい状況が続きそうです。

紙野桂人先生を偲んで

舟 橋 國 男 (A64)

本学名誉教授紙野桂人先生は、平成14年7月12日、心不全により享年69歳にて逝去されました。

同じ研究室に学びました後輩の一人として、茲に、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、四十数年に亘り、広い視野と高邁な見識で学生の教育、研究の推進ならびに後進の指導育成に努められ、多くの優れた研究



者・技術者を社会に送り出されると共に、学内はもとより、学協会を初め多方面にわたる社会的活動を展開されました。

先生が特に都市計画等の関連分野で大活躍されたところから、都市計画研究者と見て居られる向きがありますが、学者としての神髄は空間論にあると私は思います。当時の足立研のゼミでは、吹田キャンパス移転に伴う実施設計段階の超多忙な日常の中で、エルンスト・カッシャー、スザン・ランガー、メルロ・ポンティ、オットー・ボルノウ等を読んでいましたが、我々学生の不勉強が厳しく叱責され、緊張感に溢れていました。

また、私がM1の頃、浪速芸大(現・大阪芸大)の設計コンペがあり、足立先生には内緒で、若輩を率いて応募されました。力及びませんでしたが、私にとっては初めての経験であり何夜も徹した東野田の二号館製図室の情景が今も浮かびます。

ずっと後になって、先生はSpace Humanics 即ち空間人間学を樹立したいとの構想を語っておられました。ようやく時間にもゆとりが出来、本格的な集大成への途半ばにして残念でなりませんが、我々後進が先生の想いを引き継ぎ、及ばずながらいささかなりとも学恩に報いたいと念じています。

先生は、学の内外に亘る重責を負う多忙な日々の傍ら、ご承知のようにチエロをこよなく愛され、ご令室同伴のご旅行を大いに楽しまれました。更には、秘かに俳句をものされていました。日本都市計画学会功績賞の記念として、最後にまとめられました自撰句集「諸地流詠」はその成果の一部ですが、そこに納められている「初蝉の声聞く朝を目覚めけり」という爽やかな一句のように、心安らかなこれから日々をお過ごし下さいますよう心からお祈りしています。

略歴

昭和31年3月大阪大学工学部構築工学科卒業、同大学院を経て、昭和37年以降、助手・講師・助教授を歴任。昭和58年10月教授昇任、建築工学第三講座(建築計画学)を担当。平成6年7月評議員。平成8年3月停年退官。平成8年4月帝塚山大学教授就任。平成14年3月退職。

主要研究テーマ

空間論に関する哲学的考察、空間認識に関する実証的研究、人間行動の空間性に関する科学的分析、視覚的語彙の抽出に基づく都市景観形成論、等々。

受 賞

平成元年：日本建築学会第一回霞が関ビル記念賞論文賞

平成11年：日本都市計画学会石川賞

平成13年：日本都市計画学会功績賞

近年の主な公職（順不同）

大阪大学：創立五十周年記念海外学術調査・学術交流事業専門委員、国際交流委員会委員、長期計画委員会委員・同吹田第一地区委員長、埋蔵文化財調査委員会委員、開放講座運営委員会委員長、いちょう祭委員会委員、工学部附属生物工学国際交流センター運営委員会委員、工学部将来建物計画WG委員会委員長等。平成6年7月?評議員。

学協会：(社)日本建築学会評議員、(社)日本建築学会都市計画委員会幹事、(社)日本建築学会都市計画委員会都市計画教育小委員会委員、(社)日本建築学会設計競技本部審査員、(社)日本建築学会近畿支部常議員、(社)日本建築学会近畿支部都市計画部会主査、(社)日本都市計画学会理事、(社)日本都市計画学会関西支部副支部長、(社)日本都市計画学会関西支部支部長、(社)日本都市計画学会震災復興都市づくり特別委員会委員長、日本計画行政学会理事、日本計画行政学会常務理事、日本計画行政学会関西支部理事、日本計画行政学会関西支部支部長、日本環境共生学会理事・副会長。

国ならびに各種公的団体：国土庁国土審議会近畿圏整備特別委員会特別委員、国土庁国土審議会近畿圏整備特別委員会計画部会部会長、国土庁国土審議会首都圏整備特別委員会計画部会特別委員、国土庁国土審議会中部圏開発整備特別委員会計画部会特別委員、国土庁国土審議会近畿圏整備分科会特別委員・会長代理、日本学術会議都市地域計画研究連絡委員会委員、日本国有鉄道精算事業団資産処分審議会近畿地域計画部会専門委員、大阪府総合計画審議会会长代理、大阪府建築審查会会长、大阪府屋外広告物審議会会长、大阪府福祉のまちづくり推進委員会委員長、大阪府福祉のまちづくり条例改正検討委員会委員長、大阪府津田サイエンスヒルズ整備検討委員会委員長、奈良県「遊」のある奈良県づくり検討委員会委員長、奈良県「遊」を語る懇談会委員長、奈良県新総合計画審議会委員、奈良県新総合計画審議会基盤専門委員会委員長、奈良県世界に光る奈良県づくり懇話会座長、奈良県公共事業評価監視委員会会长、奈良県平城遷都1300年記念2010年委員会委員、奈良県歴史・文化国際交流ゾーン整備検討委員会委員長、大阪市開発審査会会长職務代理、大阪市屋外広告物審議会会长、豊中市文化財保護審議会委員、豊中市文化財保護審議会副会長、豊中市都市デザイン委員会会长、豊中市特別土地保有税審議会会长、豊中市都市計画審議会委員、豊中市都市計画審議会会长、箕面市都市計画審議会委員、箕面市都市計画審議会会长、箕面市総合計画審議会委員、堺市景観審議会会长、堺市屋外広告物審議会会长、堺市景観賞審査会会长、堺市総合計画調査研究専門委員会座長、堺市建築審査会委員、堺市建築審査会会长代理、堺市住宅審議会委員、堺市大小路シンボルロード整備推進協議会副会長、堺市大小路デザイン専門委員会委員長、神戸市総合基本計画審議会委員、神戸市総合基本計画審議会委員・都市空間部会部会長、神戸市復興推進懇話会副座長、神戸市復興・活性化推進懇話会委員・コンパクトシティ専門部会部会長、羽曳野市総合基本計画審議会委員、羽曳野市まちづくり創生委員会委員、(財)関西文化学術研究都市推進機構学術委員会委員、(財)大阪湾ペイエリア開発推進機構整備計画に関する委員会委員、(財)大阪湾ペイエリア開発推進機構参与、(財)大阪湾ペイエリア開発推進機構なぎさ海道推進会議副代表、大阪湾ペイエリア開発推進協議会幹事、(財)堺都市政策研究所理事、(財)堺都市政策研究所理事長、等々。

構築22年の思い出（その5、最終回）

名譽教授 伊藤富雄

阪大建築の俊英たち — 今回は、建築コースを卒業後、特に優れた業績を挙げ社会に大きな貢献をした諸君のことを思い出し、その功績をたたえたい。なお、本文の作成に当たって樋崎正也君、片倉健雄君、脇山広三君から多大のご助言をいただいたことを付記して、心からお礼申し上げる。

大学 — 母校阪大の建築工学科の教授になったのは、樋崎正也君(昭29、建築学会論文賞を受賞)、紙野桂人君(昭31、評議員、建築学会霞ヶ関論文賞を受賞)、脇山広三君(昭33)、舟橋國男君(昭39、評議員、建築学会論文賞を受賞)、吉田勝行君(昭39)、柏原士郎君(昭41、建築学会論文賞を受賞)、橘英三郎君(昭41)、今井克彦君(昭42)、大野義照君(昭42)の9人で、これらの諸君は、括弧内に特記した業績も含めて教育・研究上多大の貢献をしている。また、大久保昌一君(昭28)は、環境工学科の助教授として母校に帰ったのち、法学部教授に迎えられ、法学部長にも選任された。東孝光君(昭32)は設計事務所を主宰して建築学会作品賞を受賞し、その後環境工学科の教授に迎えられて活躍した。

次に、他大学で看板教授となり多大の功績のあった諸君を思い出すと、広島大学の椋代仁朗君(昭26)は、環境学部の創設に尽力し、その学部長、大学院研究科長となり、近畿大学の片倉健雄君(昭28新)は阪大微生物病研究所その他の設計で著名である。熊本大学では、黒羽啓明君(昭29)が建築学会論文賞を受賞し、評議員、工学研究科長にも選任され、その後を三井宜之君(昭39、評議員)が追っている。また、名古屋大学の谷川恭雄君(昭30、建築学会論文賞を受賞)、大阪市大の中根芳一君(昭39修、梅花短大学長)、近畿大学の小島政君(昭40、建築学会作品賞を受賞)の活躍が光っている。中国では、黄弘明君(昭29)が上海の同濟大学教授として日中の学術交流と親善に尽くした功績は大きい。

省庁・公団・地方自治体 — 建設省の畠利一君(昭28、中国地建営繕部長)の建築学会作品賞受賞と、日本住宅公団の籐内幸雄君(昭28新、理事)の活躍が注目される。地方自治体では、まず大阪府で米田元一君(昭28新、建築部長)、河野靖君(昭33、企業局理事)、松尾純君(昭41、建築都市部長)が大きな足跡を残した。特に米田君が部長の時には、建築、土木、水道の3部長を阪大構築で独占し、快哉を叫んだことが思い出される。大阪市では、岡本宏行君(昭37、都市整備局長)と坂雅勝君(昭44、住宅局理事)が栄進し、神戸市の末岡利雄君(昭38)は建築学会作品賞を受賞し、住宅局長に就任した。

建設業 — 各方面で長年にわたって特に優れた業績を挙げ、役員などに昇進した諸君としては、まず、竹中工務店では、北村隆夫君(昭26、専務)、三国泰路君(昭26、取締役)、籐内幸雄君(昭28新、専務)、前田忠男君(昭31、常務)、西川富士雄君(昭37、取締役)と多士済々である。このうち特に北村君は、米国竹中を立ち上げるなど海外事業で活躍し、シンガポールのチャンギ新空港1期工

事の責任者となり、国内でも新阪急ホテル、大阪国際ビルなどの設計者として著名であった。鹿島建設では、永吉晋一君(昭34)、日下部弘君(昭35)、吉本文彦君(昭36)、入江恂一君(昭37)の4人が役員直前の一級社員に栄進し、池端登君(昭38)が常務に選任された。大林組では、広田洋一君(昭29、取締役)、金田宏君(昭34、取締役)、藤繩正俊君(昭36、常務)の活躍が光り、清水建設の橋節哉君(昭32、取締役)も立派な業績を残している。

次に、松村組では、伊藤俊夫君(昭26、副会長)を先頭に、岩城良信君(昭28、常務)、立石宗一君(昭28新、常務)、石田忠良君(昭41、取締役)がこれに続き、奥村組の谷哲司君(昭34、取締役)、川田忠典君(昭35、取締役)と中江新太郎君(昭38、取締役)、鴻池組では、松本隆君(昭32、専務)、黒川暢一郎君(昭33、専務)、笛本孝史君(昭41、常務)、これらの諸君の活躍が光っている。また、東洋建設の浦山康正君(昭26、常務)、全建開発の新井一郎君(昭26、社長)、公成建設の木村聚君(昭27、常務)、フジタの北山雄造君(昭28、副社長)、不動建設の小川充郎君(昭31、取締役)と三吉勝君(昭34、常務)、駒井鉄工の上田弘一君(昭31、副社長)、大木建設の熊田洋之君(昭35、専務)、安藤建設の閑念利政君(昭40、常務)も輝かしい業績を残した。しかし、ここで特に紹介したいのは、東郷武君(昭39修、昭42博)の功績で、大和ハウスに入社してプレファブ構造のパイオニアとなり、社長に栄進して同社に今日の繁栄をもたらした。

設計事務所 — 東畠建築事務所では、鈴木洋也君(昭27、専務)がリーダーとなって後輩の指導に当たり、その中から今倉邦彦君(昭32、常務)、石川功君(昭33、取締役)、真塚達夫君(昭36、社長、建築学会業績賞を受賞)、星忠甫君(昭38、常務)、香西喜八郎君(昭43、昭45修、執行役員)、河上隆志君(昭44、昭46修、執行役員)と優れた人材を輩出し、多数の著名な作品を生み出している。日建設計では、矢野克己君(昭28)が構造設計技術者として活躍し建築学会作品賞を受賞したのち、常務、東京本社副代表に栄進し、さらに多数の学協会の会長などを務め、各方面に多大の寄与をしている。また同社では、三浦忠誠君(昭35、取締役)と設備設計の草分けとなった中村亮君(昭27)の活躍を見落とすことができない。また、設計事務所ヘキサは安原秀君(昭36)、中筋修君(昭37)、小島孜君(昭40)の3人が開設したもので、ここでエンドユーザーに直結するコーポラティブ住宅の設計と普及に尽力し、建築学会の作品賞と業績賞を共同で受賞した。

次に、建築設計上特に優れた業績を挙げた諸君を紹介すると、村野・森建築事務所で構造設計の中心となった前川陽一君(昭27)、高橋上田設計事務所の社長で海外でも活躍した上田宏二君(昭28)、赤崎建築事務所代表取締役で後輩の育成に功のあった赤崎尚信君(昭30)、数多くの独特なデザインで著名な設計事務所ジェネラルドラフティングの神出津嶺雄君(昭30)、海外でも多数の優れた作品を残した福渡建築コンサルタンツ代表取締役の福渡勲君(昭30)、英国で活躍したのち今は北島道生アトリエ一級建築士事務所を主宰する北島道生君(昭32)、倉敷中央病院などのデザインで著名な浦辺設計取締役の辻野純徳君(昭32)、大建企画設計常務取締役の木村輝久君(昭39)、構造設計の権威で川鉄常務の滝沢章三君(昭41修)と誠に多士済々である。これらの諸君の功績に心から敬意を表したい。

漬物考

名譽教授 楓木亨

私は京都生まれ、京都育ちのせいか漬物に執着する態度が人より強いらしい。育った場所が京都洛北のため、洛北深泥池、上加茂付近の特産である“すぐき”、大原・八瀬の特産である“柴漬け”、賀茂なすの“どぼづけ”などが大好物であるが、近年いずれも高価すぎて簡単には手にはいらない。大阪大学教授のころはあまり時間もなく漬物にそれほど執着しなかったが、冬場の“沢庵漬け”作りは、徳島、名古屋時代からの例年行事であった。当時漬物石が手にはいらなくてコンクリートで手頃な大きさのブロックを作り、それを水に漬けてあく抜きして使っていたのも思い出のひとつである。吹田に自宅を建てた頃からは、庭石の残りの手頃な石を用いていたが、先日ホームセンターに行くと取っ手のついた大小さまざまな漬物石が売られており、私同様自家製の沢庵漬に取り組んでおられる家庭が多いことに意を強くした。また最近百貨店の家庭用品売り場に簡易なばね付きの漬物専用のポリボックスが売られている。これも浅漬け専用あるいは塩漬け専用としては便利なものである。これを使って我が家平成13年冬の製品を列挙すると次のような漬物がならぶ。1. 日野菜漬け、2. 赤かぶ漬け、3. 白かぶ漬け、4. 白菜漬けなど、これも自家製の“ゆず”をいれこんぶを入れて試食してみた。女房曰く「漬物は貴方にまかせました」と。このため旅行で国内各地に行くと、その地の名物漬物に目がいってしまう。広島の広島菜、熊本の高菜漬、信州の野沢菜など是有名である。しかしあきのこない漬物といえば“沢庵漬”を万人がおす。これを開発したといわれる沢庵禪師は宮本武蔵の小説によくでてくることから、およそ400年以上もまえの人である。しかし考えてみると、この“たくあん”だけでなく、さきに挙げた各地の有名漬物は、いずれも土地の野菜を利用したもので安く手にはいり易いものである。それらが数百年のちの人々に受け入れられているのは何故だろうか？その理由は、1. あきがこないこと。2. 土地の産物を利用して安く材料を手にいれられること。3. 手軽に作れること。4. 人に喜ばれること。などが挙げられる。現在ベンチャー企業で多くの製品開発が進められているが、以上の項目を満足しなければ後の世にまで残る製品とはならないだろう。これらのことから土木関係で、この“たくあん”に匹敵する発明は何であったかと考えてみると、コンクリートが挙げられる。コンクリートを環境破壊の代表のようにいわれている知事もおられるが、コンクリートにはこれまで長く使われてきた歴史があり、その長所ははかりしれない。いまコンクリートを使わないので土木工事をするならば何世紀かの昔の土木技術に戻ると同時に安全性の低い、しかも高価なものになるのではないだろうか。漬物考の最後にあたってこのような考えに落ち着いてしまうのである。

日本建築総合試験所退任のことなど

夫 情 本 勤

名譽教授 五十嵐 定 義

この6月末に試験所の理事長を辞任したご挨拶にかえて、暫くご無沙汰していた「構築会だより」に筆を執ることに致しました。

丁度6年前、大阪産業大学との兼務を条件に理事長をお引き受けした当初は、予想通りに大した案件も無い平穏な毎日でした。しかし、その頃に、着々と進められている規制緩和措置や公益法人の見直し、建築関係法規の全面的な改変などがもたらす事態を予見して、何がしかの備えをしておくべきだったと、先見性の無さを後悔やむことになりました。

と申しますのも、平成10年に入った頃から、震災復興事業の終息や建設不況の影響を受けて試験業務量が漸減して行く中で、基準法の改正や住宅の品質確保に関する新法への対応に追われ、また、在来業務に対する行政的な支援にも陰りが見えるという厳しい情勢になって来ました。

ご理解頂いているとは思いますが、多くの公益法人の財政基盤は意外に脆弱で、例えば、好況時においても過大な収益を計上したり不況に備えてストックすることは許されません。収益はすべて公共事業を通じて社会に還元するという原則は当然ですが、「公益」の考え方や「景気変動に対する柔軟性」に問題があるように思われます。

そのようなわけで、平成10年、11年度には企業社会並みに組織の改変や業務の合理化・経費の節減に専念する状況が続き、心ならずも皆様にご無沙汰する結果になりました。

幸い建築確認検査や性能評価などの業務が順調に立ち上がり、試験業務量も下げ止まったようで、2年程前から人的・物的両面での将来への布石をうつことが出来るようになりました。また、井上豊所長(名譽教授)や金田宏常勤理事(A58)、田村博(A69)、吉田正友(A72)両部長らを中心に、強力なメンバーが揃いましたので、ここらが潮時かと退任を決めた次第です。

激しい技術革新の時代に入って、在阪の当財団に寄せられる官界・業界のご期待が一段と強く感じられるだけに、退任に当たって理事長としての責任を果たしたと自負できるのは本当に幸せですが、それにつきましても、大阪大学や大阪府・市、或は関係諸団体、企業にご在籍の構築会員諸兄から絶大なご支援を頂いたお陰だと深く感謝しています。

こうした経緯で7月から何の束縛も無い気楽な生活に入りました。時計を見ながら行動することも減りましたし、深夜の読書で翌朝の予定を心配する必要も少なくなりましたが、この先の単調な日々にどのような“めり張り”をつけていくか、有り余る時間を如何に効率よく利用していくか思案しています。広い領域の読書に深く入って行きたいという予てからの憧れは一層強まって来ていますし、始めたばかりの油絵についても、せめて皆様にご披露できるレベルにまで腕を上げたいものです。ガイドブックを眺めて旅行先を思案する楽しさも格別です。

しかし、それもこれも健康であってのこと。今の体調を維持し、周りの方々にご迷惑をお掛けしないひそやかな日々を持ちたいと願っています。

近況報告

名譽教授 鈴木計夫

この稿を書き始める前に、まったく寝耳に水の報せを受けた。紙野先生の訃報である。告別式でその状況が少し分かったものの、無念の思いでいっぱいです。心よりご冥福をお祈り致します。

さて、退官して6年目になりますが、それはあっという間に過ぎた時間もありました。この構築会だよりには全くご無沙汰そのものでしたが、阪大には定期的な研究会もあり、また“工学部創始100周年記念碑”のメンテ等もあって、時々は訪れておりました。現在の勤め先の福井工業大学へは火、水、木の週3日“出張”し、講義や卒論の指導を行っておりますが、ここで出張と表現したのは、在福中は、大学内にある温泉つきの大学のホテルに泊まっているからです。私が勤め始めた時は、阪大の建設系出身者は私一人でしたが、その後船海の浜本先生が見え、また今年は土木の森先生が着任されて、少し賑やかになっております。

上記のような生活状況ですので、阪大においていた頃と比べると気分的には大分楽になりましたが、実はその間兵庫県南部地震の後始末、すなわち震災を教訓とした将来対策等で結構多忙な毎日でした。なにしろ震災では実に6千数百人の尊い命が失われ、同時に建築物等の莫大な社会資産の損失がありました。これから21世紀はどうしたらよいのか、地域を、地球をどうしたらよいのか、皆さんそれぞれの立場で真剣に取り組んでおられると思いますが、上記のような少し気が楽になった立場から、2・3の提案を述べてみたいと思います。

木造建築(住宅)を低成本で耐震化しよう：兵庫県南部地震では犠牲者の実に9割の6000人ほどが木造住宅の倒壊によるものでした。もし震度6,7の大地震が日本のどこかを襲えばこれと大同小異の大被害になることは火を見るより明らかです。特に築後15~20年以上を経た建物が危ないと言われています。これは、建築に携わる者としては何としても防がねばなりません。古い住宅の耐震補強が遅延として進まない理由は普通の補強では300~400万円はかかる上、通路等も新設壁で塞がることにもなるので、補強依頼の踏ん切りがなかなかつかないようです。しかし、ここに良い解決策があります。神社仏閣等、古い木造建物を主対象として(株)鴻池組が開発した“コーナー型ダンパー”を利用する方法です。数十個のダンパーを取り付けて費用は100万円以下で済み、地震時最大変位を半分以下にできるという優れものです。新築建物に対しては“ダンパー数個取り付けて壁一枚省略”的方向も見えてきました。これを普及させるため2年ほど前から研究会を組織し、NPO化を目指しています(詳細省略)。

ピロティー構造を育てよう：あの大震災以来、ピロティーは危ないから止めておこうという風潮が見られます。しかし、電車で1・2駅乗っただけでも窓から幾つかのピロティーを見ることができます。既存も新築もピロティー層の特に柱を的確十分な横拘束(コンファインド)補強し、ダンパーも取り付けければ、±30cmの層間変位が可能な“免震層”が安価に得られます。他方、どの階の部屋も被害を受けて補強工事をされるような建物は、できれば御免こうむりたい、というのが消費者の本音であり、これに謙虚に耳を傾けていただきたい(詳細省略)。

都市の緑化：大阪よりもずっと緑の多い東京でさえ、“ヒートアイランド”的問題が特集として報じられています。地球環境だけでなく、人間の精神、健康にも大きく影響するコンクリートジャングル都市は早く改善すべきです。都市のビルや住宅の屋上の緑化、庭園化、等々、行政も全面的に減・免税の応援をすべきです(詳細省略)。

上記の3項だけでも幾つかの仕事が生まれます。これからは仕事は自らが創り出す時代です。

土木屋として30年、これからも土木屋でありたい

鳥居 剛 (C72)

東亜建設工業(株)に就職して30年、本当に面白く楽しく色々な経験をさせていただいております。四回生の春、就職先として、大手ゼネコンを希望したところ、クラス40数名中3名の志望が重なり、教官のアドバイスもあって先輩のいない会社を紹介していただきました。生来の粗っぽい気性からして堅苦しい所は長続きしないだろうし、先輩に迷惑をかけたくないとの思いで当社を選んだのです。阪大からの第1号であったため、会社の大配慮により、ほとんど無試験での採用となりました。

入社後、設計に配属となり2年間港湾構造物設計を経験した後、6年間港湾工事に従事しました。1980年、30歳の時、イラクへの赴任を打診され、すこし躊躇しましたが、愛しい妻を日本に残し後ろ髪を引かれる思いで単身バスラに向かったことを覚えております。着任当時、英語は全くお粗末であり、常に紙とペンを持って辞書を片手に筆談激論をしながら工事を進めねばなりませんでした。そんな中、赴任3ヶ月後、当現場付近にイランイラク戦争開戦の第1発目の爆弾が投下され、戦火の中での工事開始となったのです。即刻、本社から全員帰国命令が出て、チャーター便で日本に戻ることになるのですが、契約履行義務のため4ヶ月後再赴任しなければなりませんでした。最高気温58°Cの砂漠気候の中、インド人労務者数百人を直営で使い、港湾施設、建築、鉄道、上下水道、設備等工期2年の工事です。さらに、完成間近の3ヶ月前、工事現場のど真中にイランのファントム3機が飛来し200kg爆弾を15発投下、建屋を大破されたのです。にもかかわらず、工期厳守に忠実な日本人は、必死になって工期内完成してしまうのです。戦争という特殊状況下での海外工事となりましたが、私には強烈なものが残りました。直営形式で工事を工期内完成させた満足感、国際ルール下での発注者と施工者の対等の立場でのフェアーナビジネス、民族宗教の違いを超えた人々との出会い、妻からの手紙の待ち遠しさ、等々、土木屋で本当によかったですと感じることができたし、また、技術者としての自信が培われたことが大きな財産となりました。帰国した年、当社に初めて留学制度ができ、タイミング良く、最初の留学生としてフロリダ州のマイアミ大学への入学が決まりました。1985年修士課程を卒業、それ以来1994年まで計14年間国際事業部に所属し、アフリカ、南西諸島、南米、東南アジア、中近東に至るまで開発途上国28ヶ国を工事と調査で訪れました。湾岸戦争勃発時、バグダッドで間一髪人質にならずにヨルダン国境に逃れたことや、地雷の点在する中のクウェート港湾施設戦災復旧工事など危険なところもありましたが、それ以上に海外工事の醍醐味を存分に味わうことができました。国内赴任の翌年1995年の神戸淡路大震災にも遭遇しましたが、復興工事の2年間に全力投入できたのは海外で培われた仕事への自信と情熱があったからだと思います。これらの経験を是非、学生に聞かせるようにとの恩師のアドバイスがあり、1998年から4年間、「民間企業における海外工事と震災時の危機管理について」をテーマに大阪大学で非常勤講師もさせていただきました。「環境の変化は常にあり、企業も組織も常に変化し、時には無くなることもあるが、個々人の仕事への確固たる技量と自信と情熱があればいかようにも対応できる、決して問題から逃げず、正々堂々と正義を持って立ち向かう気持ちがあれば、仕事も面白く楽しくやっていける」と講義では繰り返してきました。変革といわれる時代に最も必要なことだと思います。

最後になりましたが、1970年の大阪大学学園紛争により、教養部封鎖等波瀾に富んだ学生生活を経験してきた我々C72年組は川谷充郎君を中心に、卒業以来30年経った今でも、事あるごとに集まり、学生時代にタイムスリップしながら純粋に議論をし、青春を楽しんでおります。これが私のもうひとつ財産となっています。

我々は、何にむかって何を構築しようとしているのか

三 好 庸 隆 (A72)

21世紀に入って早や2年が経過。改めて述べるまでもありませんが、今社会は急速にそのパラダイムを変革しつつある、あるいは変革しなければならないような事態に至っていると実感しています。我々の分野も、不況ということもあり極めて難しい局面に遭遇しているとも言えますし、捉え方ひとつですが、旧来型の仕事へのアプローチ、手法、技術が威力を発揮できなくなり、新しい視座を開拓した個人や小組織が旧来型の大組織に対抗しうる、おもしろい時代に遭遇しているとも言えましょう。また我々建築、都市計画・都市環境デザインの分野においても、単に造ることが善、という価値観から、循環型社会・人口減少社会などのパラダイムを背景にく何にむかって、どのように何を構築しようとしているのか>という思想、あるいは仕事への取り組み方が強く求められていると思います。

ところで、私の事務所は、比較的<川上>の仕事であります都市計画・都市環境デザインから、いわばその内容の実体化といえます<川下>の建築設計までを射程内に入れ、先の考え方留意しつつ、仕事に取り組んでおります。具体的な業務としましては、例えば大規模都市開発の開発コンセプト・仕掛け・仕組みについての検討や、木造密集市街地におけるまちづくり、老朽化した市営住宅の居住者参加型建替事業の推進・設計、関西での最後の大規模ニュータウン開発となるであろう国際文化公園都市<彩都>における集合住宅街区、戸建街区等の企画・計画・設計などを行なっております。これらの仕事は多くの場合、計画・設計条件を考えることから仕事はスタートしますとともに、中には建設したあとどのように良好なコミュニティをそこで育てていくか、といった比較的ソフトな内容も求められています。空間も、單にかっこいいハードをつくるといった感覚ではなく<ソフトを育むハードとは何か>といった感覚で設計していくことが求められていますし、大切なことと思っています。

また、私は、25才頃より多くのニュータウン(以下N.T.)の計画・設計にも携わってきました。そのようなことから、人口減少社会における郊外ニュータウンのあり方・持続的発展・サスティナブルなコミュニティのあり方についても多大な関心(造ってきた者の責任)を抱いております。そのようなことから、イギリスN.T.その後をリサーチしますとともに、肌で感じるべく、数年前より再び意識的に、イギリスN.T.に足を運んでおります。

今年も7月10~16日の間、最初のガーデンシティであるレッチワースに昨年に引き続き訪問しますとともに、約30年前私が学生時代に数ヶ月滞在したことがあるハーローN.T.のその後をじっくりと視察してきました。有用な資料も入手してきており、忙殺されています日常ですが、こまめに時間をみつけ分析し、日本の郊外ニュータウンの持続的発展方策について知見を得るとともに、私なりの考えを深めていきたく思っております。紙幅の関係上、詳細に触れることはできませんが、ご関心のある方は是非ご連絡ください。

ところで、先のレッチワースに滞在中、日本からのFAXを受け取り、紙野桂人先生が他界された旨を知り、大変な衝撃を受けました。不透明な時代ゆえにまだまだ先生の知見を時代が必要としていたと思います。ご冥福を祈ります。

特集「変革の世紀にどう前向きに対応する」

進化と遺産、文化と美学 —ライフスタイルと編集—

池 上 俊 郎 (A74)

現在は“変容”的時代だと思う。

社会は進化するものである、そのことは社会を輝かしい楽観的未来に導くであろうと思い込んでいた。

かつて高名なお寺の方に“永代供養”は何年ですかと訪ねた。“30年”ということであった。つまり葬られてから30年経てば供養する必要がなくなるのである。30年永代供養説は、社会の30年変容説と読み直せる。

“建築”は、重力とともに成立するシェルターを創って来た。人々の活動領域そのものであった。構造的思考とアクティビティを加え、我々の未来の生活領域を創る形式として存在してきた。こうした建築の概念自身も変容しようとしているように思う。この30年で26国、90都市を歩き、時代の先端の建築と都市の変化、そして維持される生活環境を見てきた。“進化と遺産、文化と美学”“ライフスタイルと編集”が現在のキーワードである。

現在の私の関わる領域は4つである。ホームベースは制作者である。建築家として、機能を空間・形態に統合することである。スケールを1：1から1：200,000を等価として都市・地域レベルから生活レベルの空間やモノをデザインすることである。具体的には建築を中心に都市、ランドスケープ、インテリアデザイン、生活領域の家具やプロダクトデザインを行い現実社会に提案してきた。生活や社会を編集し、時代が探るライフスタイルを模索する。

第2は、教育研究者である。京都市立芸術大学で環境デザイン領域を指導している。美学的価値から社会を考えると言う、工学部出身者として対局から思考する機会を得ている。

第3は、評価者としてのデザインコンサルタントである。Gマークでおなじみのグッドデザインの審査を基盤に、“現代におけるデザインの役割を評価し伝えること”を行っている。

第4は、市民である。NPO法人エコデザインネットワークの運営に携わっている。大久保昌一本学名誉教授に理事長を御願いし、また本学出身の友人に協力していただいている。

前3領域は楽観的社会の存続を前提とし。第4領域は地球環境問題という悲観的未来を回避する試みである。

進化と遺産

我々の社会は国際化し、ボーダーレス化している。いわば水平的社会である。宇宙遊泳にも似た浮遊空間である。こうした社会に必要な繋留地が垂直の時間軸である。我々が継承してきた過去から未来への連続するベクトルを探らねばならない。“浮遊”するための浮き輪のようなものである。

私の大学では、現在“宇宙に対する芸術的アプローチ”と題した研究を行っている。人間の棲息領域としての宇宙空間のあり方を芸術視点から探るものである。

デザインコンサルタントとして、現在“関西宇宙工場の挑戦—東大阪に始まるモノづくりの技術と夢”という展覧会を2002年11月に企画している。“中小企業ネットワークで人工衛星を創ろうとする”モノづくりの現場と未来技術のあり方、その根底にある次世代のライフスタイルを探るもの

である。現在構成をアートデレクタや地元の人ともに探っている。ミクロンレベルの精度の要求が、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、環境問題と相互に関連して先端技術を形成しようとしていることが読み取れる。かつてNASAが切り開いたことと同レベルの産業展開が始まろうとしている。デザインはいつの時代も新たな産業がはじまる地平とともにあった。アジアへの技術移転の激しい今次世代の産業社会の可能性が始まっている。

また私の研究室では京都教王護国寺一東寺の主だった建物の3DCG化を進めている。1000年の時間を超えて途中焼失しながらも立て直してきた歴史は、“遺産としての空間”の継承の必要性を改めて考える。木造建築の構築手法は地域的に偏在しており、日本、アジアの精神的社会構成についても示唆的である。

“楽観的未来をいかに構築するか”をテーマとして、過去から現在を見る眼と、まだ想像の中にしかない未来を生活空間、社会空間の視点から捕らえることを“進化と遺産”として今探っている。

文化と美学

日本社会は高度な産業社会である。産業社会は一つの解答を求めてきた。多様な価値の求められる社会にあって科学的価値に対して美学的価値を対等に捉えたい。社会は、“形式”ではなく“存在理由”としてあるように思う。またあらゆる空間やモノは人々の感性と呼応してきた。生み出されるすべてが美学と文化を担う事が求められる。

私も卒業してほぼ30年。“進化と遺産、文化と美学”“ライフスタイルと編集”的言葉に導かれて次の供養にむけた変容を自らしなければならない。

今後の大坂臨海部開発

(10) 一 帆 水 遊

北村 雅俊 (CM76)

昭和51年に大学院を卒業し、大阪市港湾局に奉職し、港湾行政に携わりはや四半世紀以上が経ち、今回このような拙文を書くに際し、現在遊休地の拡大が顕在化し、土地あまりとも言うべき状況にあり、今後の対応が喫緊の課題である大阪臨海部の開発が今回のテーマにふさわしいのではないかと考えました。

大阪臨海部は、戦後から高度経済成長期にかけて、重化学工業が立地する臨海工業地帯を形成してきました。昭和33年に着工した南港造成工事も当初は臨海工業用地の造成を目的としたものであります。

しかし、昭和40年代に入ると公害や大気・水質汚染など都市環境の悪化が社会問題となり、臨海部開発は大きな転機を迎えることになりました。当時、海上輸送の技術革新が進み、コンテナ船専用埠頭やフェリー埠頭を中心とする近代的な港湾施設の建設が急務となっており、南港においても商港化計画を根幹とした長期計画を策定し、新たな港湾施設整備がなされることとなりました。

一方、環境面での港湾に対する要請が高まり、南港野鳥園をはじめとする大規模な緑地を整備するとともに、住環境に細かな配慮をした緑豊かな南港ポートタウンの開発や、都心部における住工混在を解消する場として企業団地が臨海部の埋立地に立地することになりました。さらに、増大する都市から発生するごみ、船舶の大型化に伴う航路や泊地浚渫に伴う土砂などを適正に処分するために、北港北地区、北港南地区の廃棄物処分場が海面埋め立てにより確保されてきました。

昭和60年代において、廃棄物処分によりできた新規埋立地をどのように利用するのかを定めたのが「テクノポート大阪」計画であります。本計画は、21世紀の大阪市が備えなければならない都市機能を先行的に集積させることにより、近畿圏・大阪都市圏の発展をリードしようとする新しいまちづくりを推進する大規模プロジェクトであります。

この計画に基づき、大阪国際見本市会場(INTEX大阪)、アジア太平洋トレードセンター(ATC)、大阪ワールドトレードセンター(WTC)などが開業し、北港北地区(舞洲)においては、市民の健康増進から国際級のスポーツイベントまで幅広く利用できる「スポーツアイランド」が形成されてきています。

このように大阪臨海部は、新たに生み出された土地を大都市が抱える都市問題解決の場として、また大阪市が打ち出す新たな施策の発現の場として活用されてきました。

しかしその後、社会経済環境の大きな変化や長引く景気低迷の影響から、特に民間の投資が進まず、当初の狙い通りの開発整備にいたらず、多くの未利用地が生じています。

こうした状況のもと、大阪市が21世紀の本格的な都市間競争に勝ち抜くとともに、持続的な発展を果たしていくためには、今後とも時代に即した都市機能の充実を図り、国際的な魅力を備えたまちづくりを推進していかなければならぬと考えております。

一方で、わが国の活力の源泉である大都市の再生に向けて、構造改革をはじめ、都市再生特別措置法に基づく「緊急整備地域」の指定など様々な取り組みが進められ、都市再生につながる投資にも目が向いてきたと思われます。

これを千載一遇のチャンスと捉え、将来に夢を持てるようなビジョンを打ち出し、施策や投資の方向性を定め、知恵を絞って民間の投資意欲が誘発されるような誘導策を策定する必要があると考えています。構築会の皆様で、おもしろいまちづくりプランがあればご教示をお願いしたいと思います。

学識経験者のつぶやき

青木伸一 (C81)

忙しさに追われてあまり立ち止まって考える余裕がないのが実状であるが、最近、行政レベル(各種委員会)や市民レベル(各種講演会)で沿岸域のいろいろな問題(特に環境問題が多い)に対して「海岸工学の専門家」としての意見を求められる機会が多くなるとともに、「海岸工学とはいって何なのか?」と考えさせられることも多くなってきた。特に「学識経験者」として参加する委員会では、「学識」と「経験」の無さを思い知らされることも少なくない。沿岸域という限定された対象であっても、それを構成する要素は極めて多様で、それらをすべて見渡して意見を述べることは不可能である。もちろん、我々に要求されているのは専門的な知識と見方であって、必ずしも総合的な意見を求められているわけではないのだが、そもそも土木工学が総合的な学問である以上、社会のしくみや地域の特性をある程度認識しておく必要があろうし、行政の立場や業界の実状を無視した極論を展開するわけにもいかない・・・などとすると、この悩みはいかにも土木的ではあるのだが。

1954年(昭和29年)に開かれた第1回の土木学会海岸工学講演会の講演集の序文には、「海岸工学は沿岸の漂砂および波浪の問題、これらによつて起こる災害を防ぐための海岸工作物について研究する」と明記されている。当時は台風による高潮災害や津波災害が頻繁に起こった時期で、海岸工学は自然の脅威から国土を守るという大命題を背負って立ち上がったため、このように研究の目的が非常にはっきりしていた。学問基盤は流体力学・水理学であり、これを駆使して現実の問題を解決するために研究者や技術者の叡知が結集され、多くの成果を上げてきた。もちろん、上記の目的は今でも海岸工学の柱であることに変わりはないが、「それだけでは解決できない」現実の問題が沿岸域で数多く現れてきていることも事実である。このことを反映して、最近の講演会では環境関連の様々な問題に関する論文の割合が多くなってきており、このように学問の対象が拡がるとともに、「専門家として何をすれば社会に貢献できるのか?」ということが漠然としてきているのではないだろうか。逆に言えば「何をしてもよい」ということになるのだが、これは研究者として危機的な問題ととらえるべきであろう。ただし、これまでの海岸工学では、海岸で生じている様々な現象の把握が一面的であったのも事実であり、空間的・時間的に限定的な議論が多く、また物理的な理解に偏りすぎていたきらいがある。50年の歴史しかない海岸工学ではあるが、現在は学問内容に大きな変革を迫られている時期であるといつてよいであろう。まず、海岸工学という名のもとでの研究や教育が土木工学の中でどのように位置づけられるべきなのかを改めて問い合わせ直す必要がある。特に、計画的な視点はこれまでの海岸工学に不足していたのではないだろうか。与えられた問題の物理的解釈と土木的解決策の探求という受動的な学問から脱皮して、広い意味での海岸づくりのデザイナーとなるための新しい学問体系を早急に構築する必要があろう。

思いつくまま書いていると、やや悲観的な文章になってしまったが、冒頭にも書いたように、このような悩みは本来土木技術者として当たり前の悩みなのではないだろうか。とすれば、土木の海岸工学はこれからが面白くなるはずで、しっかりと基礎力の上にバランス感覚を備えた真の土木技術者(Civil Engineer)が要求されている時代といえよう。そのためには、学生時代にやみくもに知識をつめこむのではなく、広い視野での教育や体験をさせておくことが重要であり、土木技術者とは何かを十分考え、多くの知を結集して方向性を生み出す力を養っておく必要があるのではないかだろうか。その意味で、大学改革におけるしくみの改革も重要であるが、教育・研究の最前線での見直しが最も重要であることを再認識すべきである。

建設業界の新しい枠組みとルール作りを

高 森 博 之 (C89)

建設業界をとりまく環境が大きく変わっている。公共事業に対する国民をあげての批判も日増しに高まりを見せているし、業界は建設予算の削減という厳しい現実を突きつけられている。これまで基本的にはある水準を保って推移してきた公共事業だが、今後は漸減し低水準でとどまった状態となることが予想されている。数年間ガマンすれば元に戻るといった事情ではないようである。ただ冷静に考えれば、日本中を橋でフタをするわけにも行かないし、山をトンネルで穴だらけにするわけにもいかないわけで、ある時点では建設事業が飽和状態になり、その後減少に転じ、あるレベルに落ち着くのは当然のことである。日本の公共事業費が諸外国に比べて割高であることもかねてから指摘されてきたことで、それが普通のレベルに戻りつつあるとも考えられる。

これまで右肩上がりの発展を前提にしてきた建設業界も生き残りをかけてこの変化に対応しなければならなくなってしまった。民間企業では人員の整理や配置替え、余剰設備の処分、新規事業開発などすでに進行中である。ただこのような各社や個別団体の内向きの努力だけでこの事態を乗り切れるとは思えない。これまでのところ、各社の取り組みは、具体的な対応策を講じるよりも、「みんなで一丸となってがんばろう！」といった精神論がまだ先行しているように見える。もっと外の大規模な枠組みやそこを統制してきたルールなどにも踏み込んで行くことなくして事態を変えられないと思うのだがいかがだろう。

日本には世界に誇れる独自の文化や習慣がある。したがってそれに沿った組織やルール作りをするというのは自然のこと、それが我々には最もしっくり来るはずである。建設業界も長年かけて培い、慣れ親しんだ組織を今後も維持できればそれに越したことはないのかも知れない。しかし時代は間違いなく変わりつつある。すでに皆が潤えるだけの仕事は供給されなくなっている。ダムや道路建設のあり方が議論されマスコミにも頻繁に取り上げられており、国民のチェックも厳しくなっている。国内の工事を日本の会社だけで分け合うことも難しくなってくるだろう。われわれ自身もこのような変化に対応して変わって行かなければならない。そのためにはどのような業界のかたちが望ましいのか。どちらかと言えば業界の利益や地位確保が優先されてきたものを今一度見直し、本来の受益者である国民の生活がより豊かになり、また将来につながる社会基盤作りをするにはどのような枠組みとルールが望ましいのか、本音で議論してみてはどうか。理想論かもしれないが、従来の日本のやり方に固執するではなく、また全否定するのではなく、欧米手法に盲従することでもない、すなわち日本の良さを残しながらも海外にも通用するようなかたちが確立できれば、日本の建設業界も生まれ変わり、再生の道をたどることができるのでないだろうか。design & build、PFI、CM、照査技師制度など、業務の流れや責任所在の明確化のために諸外国すでに導入されている仕組みも、日本で使えるものがあるかも知れないし、だめなら日本風に改良してもいいのではないだろうか。

こここのところ建設業界は税金を食いものにする悪の根元のような言われ方をすることがあるが、私利私欲に走っている者などほんのわずかで、多くの技術者は日本の将来を真剣に考え、そのことに誇りを持って仕事をしていると信じたい。新規工事が減って行くのは先進国に仲間入りした国の宿命だが、既設構造物の老朽化対策など、我々に課せられた責務はこれまで以上に重いものになっている。時代の変化を直視し、反省すべき点は謙虚に反省し、自ら変わる勇気を持ちたいと思う。

変革の世紀におけるコンサルタント像に関する一考察

加藤 健太郎 (C96)

建設コンサルタントとして交通計画関連の業務に従事して4年になります。その間、交通需要予測をはじめ、交通需要マネジメント、中山間地域の公共交通計画など、様々な行政政策に関わる経験をさせて頂きました。

その一方で、公共事業に対する批判が一層高まり、現実に公共事業費の削減も進められるなど、公共事業を取り巻く環境も短期間で大きく変化してきました。我々コンサルタントとしても、この変化に適応した能力を養い、新たなコンサルティング手法を確立していくことが迫られています。

そこで今回本稿の依頼を頂いたことをきっかけに、私の人生プランも含めて、将来の計画系コンサルタントのあり方を、私なりの観点から考えてみました。

従来型の交通計画コンサルタントの場合、交通量推計や費用便益計算など技術特化型のスペシャリストが求められてきました。しかし今後は、社会資本の捉えられ方が変わり、多様な視点で行政政策を検討することが求められることとなり、コンサルタントは従来の専門知識に加え、土木工学を超えた知識や知恵をもってコンサルティングできる能力が必要となると思います。

具体的に言うと、私としては、「マーケティング」や「企業経営」の視点が必要と考えます。

例えばこれまでの交通計画では、人の行動結果を画一的に捉え、それに対応した交通施設を計画してきました。しかし、公共交通をはじめとして期待通りの需要が見られない中、従来型の「社会資本を整備すれば利用するだろう」という発想から、「認知させ、魅力を持たせ、利用してもらう」という発想の転換が必要です。

これは正に、民間のマーケティング戦略やプロモーション戦略(PRや販売戦略)と共通する部分だと思います。

特に自動車交通から公共交通への転換を図るTDM施策を計画する場合には、顧客ターゲットを絞った上で、商品サービスや価格を計画し、それをPRしていくマーケティングの考え方方が、役に立つと思います。

近年、急速に閉塞感が蔓延している建設業界において、コンサルタントが生き残り、発展していくためには、発注者と独立した立場で新たな行政政策や公共事業のかたちを提示し、自らの存在意義を明確にしていかねばなりません。

そのためには、これまで少なからず存在するコンサルタントの「役所のお手伝い」的仕事で生計を立てていく体質から脱却する努力が必要でしょう。

その第一歩として、従来型のコンサルティングエンジニアとしてのスキルを、新たな領域に広げ、コンサルタントそれぞれの固有性を確立させることが重要と感じています。

最近の海外鉄道トンネルを見て

(36A) 第一眼・日本

竹山 喬 (C52)

1990年土質工学会関西支部30周年を記念し、海外トンネル技術調査団が結成された。当時支部長だった関係で団長として、山場を迎えたドーバー海峡トンネル現場を訪れた。T.B.M.と共に日本の技術が威力を發揮していた。続いてパリ、リオン、バルセロナなどの地下鉄工事を視察した。

4年後、第2回調査団はデンマークのグレートベルトリンクの海底トンネルや、長大橋視察のため、開港直後の関西空港を飛び立った。ノルウェイでは、リレハンメル・オリンピックのヨービック地下ドームや、フィヨルド峡谷に浮基礎を並べて架けられた橋梁を視察、自然と環境を大切にする北欧の姿に強い感銘を受けた。続いて訪れたベルリンとプラハでは、中欧の歴史都市のたたずまいの中に景観に合わせた地下鉄が整備されていた。

第3回は、オーストリア、ハンガリー、ポーランドなど欧州東部とトルコを視察した。ドナウ河に沿うこれらの地方は、歴史的にも地質学的にも共通点が多く、欧州の中心として早くから栄え、鉄道、トンネル工学の分野でも先進地区である。ブダペストの地下鉄は1896年に開通しており、欧州大陸で最も古く、オープンカットによる浅部地下鉄の原点といえよう。これがベルリンやニューヨークへと受け継がれ、東京の銀座線の初期にその面影が残っている。

2000年第4回調査団は、スイス・アルプスとそれに続くイタリア中部山岳地帯の高速鉄道トンネルを視察した。アルプストンネルはヨーロッパの高速鉄道網計画の一環として、仏のリヨンと伊のトリノ間の52kmの長大トンネルで結ぶプロジェクトである。イタリアの高速鉄道、ボローニャーフィレンツェ間のラティコーサトンネルは、半島を南北に走るアペニン山脈を縦断するもので、路線延長73kmの90%以上がトンネルである。オーストリア、スイス同様にイタリアもN.A.T.M.の元祖で、技術は進んでおり、更に新しい工法を研究し着実に実績を上げているように思われた。

ヨーロッパの交通網にはいくつかの“missing link”があり、その主なものは北欧の海峡である。北海、バルト海などは冬季、特に風波が強く、往々フェリー船が沈没することもあり、欠航は常で交通の障害となる。そこで、海峡を橋梁やトンネルで結び、交通を確保しようとするもので、ユーロトンネルや、デンマークのグレートベルトリンクそしてウーレンリンクがこれに当たる。これで欧州大陸と英国、スウェーデン、ノルウェイが陸続きになったのである。また欧州中央部に東西に横たわるスイスアルプスも“missing link”である。4000mを超える急峻な連峰は、ローマ帝国の昔から南北の交通を頑として阻んでいる。シンプロン、ゴッタルドなどの峠越えのルートに世界の10指に入る長大トンネルが掘られているが、十分であるとはいえない。

森林を伐採して道路を造れば自然破壊につながり、大気汚染・地球温暖化など公害をもたらす。スイスでは国民投票により「道路を造らない」方針のもとに Alp. Transit を決定した。これは南北に3本、東西に1本の鉄道トンネルを建設し、自動車もカートレインで運ぼうというものである。これが可能になったのも、鉄道の高速化と安全性に関する技術の進歩とトンネル工法に発展によるものである。即ち海の底でも高い山の下でも、長距離にわたって掘り抜いて行くことができるようになった。この両技術の進歩により、交通が単に経済、地域発展のためのみならず、環境対策の視点からも重要なプロジェクトとして位置付けられるようになった。

このたびの視察を通して、欧州の山岳地帯や海峡地域で、自然環境を守りながら歴史的な流れの中で交通を確保するための努力が嘗々と続けられ、その結果、トンネル技術の進歩がもたらされているように思えた。我々も、21世紀に向かってより高い技術の研鑽を積みたいと思う。

卒業50年を迎えて

木村 康彦 (A52)

昭和27年3月、東野田学舎をあとに旧制3年の大学生活を卒業した我々は、いつの間にか卒業50年の年を迎えることになりました。思えば感無量のものがあります。

日常は、豊かな現在の生活に慣れきって話題にもならないし、また記憶も薄れかかってもいるし、おまけに決して楽しい思い出ではない終戦に続いて少しずつ立直りかけた昭和24年4月の入学以来の情景がまるで走馬灯のようにかけめぐる有様。我々の世代はその落差が余りにも大きいのではないかでしょうか。

このような思いのなか、常任名幹事・中川君の呼掛けがあって今年4月9日(火)、宝塚・若水に15名が勢ぞろい。久闊を絞し、70年余の長寿と健康を祝い、卒業50年の祝盃を挙げたのでありました。

記念すべき節目のクラス会として、あえて出席者の名を記すと

土木：朝倉 保、鎌田義弘、竹山喬、中井善人、中川三郎、西岡悟郎、松井克好、森永和彦

矢野俊男、米田宗弘

建築：後藤啓成、鈴木洋也、中村堯、新坂一郎、前田治、木村康彦

我々のクラスは毎年4月にミニクラス会を、節目の年には“先生方をお招きして”が定番で、今年も伊藤富雄先生のお出ましをお願いした処、ご都合悪く、お出まし願えませんでした。40年の会には、伊藤先生は勿論、室田、赤尾、東畑、足立の諸先生のご出席を頂くことが出来た事と思い比べ、この10年間の重みを少なからず感じさせられた事であります。

今朝のホットニュースには、日本人男性の平均寿命は78.07才(平成14年7月31日公表の「2001年簡易生命表」)。我々も目前にして居りますが、云うまでもなく、健やかな健康が前提であっての事。これについて、昨今新聞、書店の店頭を賑わしている、満90才にして現役まさに超人的な日常生活を生きて居られる“聖ロカ国際病院名誉院長・日野原重明博士”的“いきいきと生きよ”知恵を拝聴して、大いに手本とし、とてもとても同じレベルの事は出来ないけれど、少しでも近づいて“老いを楽しみ、豊かに生きて行きたい”。そして聊かなりとも世のため人のためにお役に立つことになれば、生き甲斐、幸せというものではないでしょうか。

機上雑感

(57) 一
次
本
中

榎木通男 (C62)

今、私は2万4000フィートの上空でこの原稿を書いている。関空発9時55分PR421便マニラ行き。30年前の初めての海外出張のことを思い出しながら。今回は通算36回目であり、国内出張と同じ感覚でいる自分に改めて気づく。

羽田発JL403便アンカレッジ経由アムステルダム行き。ひとりきりの初めての海外、しかもドイツ。慣れないことば。1ヶ月間の技術習得……。渦巻く不安を抱きながら夏の北極圏の明る過ぎる窓の外を眺めていた32才。北極海の真っ白の氷原。人間を寄せ付けない自然の厳しさが心の中の不安を募らせる。未明のアムステルダム空港に到着。だだっ広い空港、西洋人の男女が行き交う中で、ようやく目的地デッセルドルフ行きの7~80人乗りのプロペラ機に乗り込んだ。中年の大きな体をしたスチュアデスが配る朝食代わりの固いパンがなかなかのどを通らなかった。目的地の空港で技術提携先の顔見知りのベテラン部長さんに出迎えられた時の安堵感を鮮明に思い出す。

安宅先生のゼミで橋梁技術者を目指していた私は、先生の薦めもあり、何より国際的な仕事をしたい気持ちから重工メーカーに入社した。チャンスは入社10年目にやってきた。会社が以前から製鉄機械がらみで提携していた西独の会社が長大橋に適した伸縮装置の技術を持っている。しかも、ヨーロッパで建設され始めた長大吊橋のほとんどに採用されている。わが国も長大橋時代の幕開け。「よし、この技術を導入しよう!」そう考えた会社の上層部は、早期の自社製品化のため技術者を派遣した。その大役を仰せつかったのが私である。

「案ずるより生むが易し」。私のトレイニー生活は、はじめの不安など日増しに薄れ、小さな失敗はあったものの順調そのもの。週末には、これもひとりのことが多かったが、ハイデルベルグとかケルンとかを見物。一泊でスイスのユングフラウやアイガーを見に行ったり。無事技術習得の方もオーケー。ただし、後日談になるが、公団さんにこの装置を採用していただくまでの苦労は並大抵のものではなかった。幸いなことに瀬戸中央自動車道の吊橋などで役立っている。

重工メーカーの中にあっても橋梁に携わる者にとっては、これは数少ない貴重な経験事例となったようだ。おかげで社内では海外橋梁プロジェクトのほとんどに参画するチャンスを与えてもらった。30年間の延べ海外滞在日数は1120日(記録を調べて追記)。ロンドンのフリーマンフォックス社での世界的な吊橋の権威者W.C.ブラウン博士との緊張した初対面とその後の共同設計などを通じた交流。80才を超える、なお矍鑠(かくしゃく)としていたホンベルグ博士との基本設計者(博士)対製作設計者(私)の激論。極めつけは、香港新空港関連プロジェクトであるランタウクロッシングの斜張橋主径間建設所長を務めたこと(この間に、あの阪神・淡路大震災があったのだ)。

と、ここまで書いて読み返してみると、自慢話に終始してしまったことに気づいた。が、小型ジェット旅客機A320はマニラ空港への降下を開始したようで、ゆれ始めたので筆を置く。

末筆になったが、5月に40年会を開催し、高寺君(物故)と2名の欠席者を除き、夫々の再出発を確認しあった。私もこの4月から新しい活躍の場を得た。必要とされる間は、向上心を保ちながら社会のお役に立ちたいと願っている。



卒業30年雑感

中木秀一 (C72)

私が入学した昭和43年は、大阪万博を2年後に控え、関西においても建設工事が至るところで華々しく実施されており、土木を志す者としては前途揚々たる時期でした。

同時に学園紛争の嵐が吹き荒れた時代であり、入学後間もない43年秋から翌年夏までの10ヶ月間教室閉鎖で授業が全く行われませんでした。この間、学生運動の中心として活躍した者、クラブ・サークルに精を出した者、学業に励んだもの、自由を謳歌した者等様々であり、その後の各人の人生に少なからぬ影響を与えました。私はこの間、卓球クラブ活動に最も力を注いだのですが、4年の時はクラブ活動のため卒業研究着手が遅れ、先生にはたいへんな迷惑をかけました。卒業30年を経た今でも、地元で趣味・体調維持を目的としたクラブ活動を楽しく継続しています。

学園紛争の影響で当初予定1.5年の教養課程が2年となったため、専門課程の授業は厳しい日程となり、夏休み等はほとんどなかったように記憶しています。3年からの専門課程は真新しいコンクリートの臭う吹田キャンパスで始まりました。北千里周辺はいわゆる学生さんの遊ぶ施設が全くなく、10ヶ月も自由な時間を持った後に学業に専念するにはいい環境でした。折りから開催されていた大阪万博の会場が眼下に広がり、遅くまで残っていると暗闇の中でソ連館、アメリカ館などが明々と輝いていた様子などが懐かしく思い出されます。

昭和47年に卒業・社会入りしましたが、高度成長期で求人はふんだんにあり、公務員等を除き今の現役の方には申し訳ないほど就職活動は順調でした。

社会に入ってから第1次、2次オイルショック～バブル経済～バブル崩壊～低成長時代と、主に経済動向に左右された時代の変遷と共に私達の役割が変化してきました。高度成長に伴うひずみ是正及び物質の豊かさから心の豊かさへの価値観の変化に対する取り組みが重要な課題となっています。構造改革、建設投資の減少に伴う経営・技術の方向転換さらには公共事業等の発注方式の見直しなどは大変身近な問題であり、リストラを含め入社当時に比べて大変厳しくなった建設産業の環境に戸惑っているのが我々世代の平均的な姿です。同窓会でも最近は担当業務の変遷などが主要な話題になっていますが、社会の大切な分野を担っていることには違いなく、地道に前向きな努力を続ける必要があります。

同窓生を含め、阪大の先生方に指導を仰ぐ機会がよくありますが、教え子・同窓生に対して親身になって指導・鞭撻頂き、業務に活かすことが出来て大変感謝しています。

私はゼネコンの土木技術者として、現場での施工を18年担当した後本社で技術推進・支援を担当しています。現場の時は景気がよい時代で、安心して生産活動に邁進してきました。都市計画・地盤技術関係の設計業務に従事した後、現在は環境・リニューアル技術を磨いていますが、何に力を注ぐのがよいかを常に意識しています。我々の技術が活用される機会がさらに増えることを望むとともに、我々が十分な責任を負う必要性を感じています。

学生時代に教えられたことの中で今でも心に残るのが「君たちはシビルエンジニアである。」という言葉です。仕事でまた身近な地区で、土木技術者あるいは土木家として市民の為になる仕事を実践し続けたいと考えるこの頃です。

卒業20年

(SD) 感 謝 小

磯 崎 正哉 (C82)

2002年、日本と韓国でサッカーワールドカップが共同開催され、日本チームは歴史的勝利と予選突破という快挙を成し遂げ、日本サッカー界にとって記念すべき年となりました。この年に卒業20周年を迎えるました。大学卒業以来、私はほとんど工事現場に勤務し、都市土木1件とトンネル6本の工事に従事してきました。トンネルに関しては延べ約10kmを掘りました。先日、現在掘削中のトンネルが貫通し、この歳になってもまだ、トンネル内に光が差し込んだ時は何物にも代え難い喜びを感じます。今回、構築会だよりの原稿執筆の依頼がありましたので、長い現場経験に基づいて今後の土木技術者としての役割やあり方について個人的な雑感をまとめることにしました。

第一には、現場技術の伝承です。日本の土木技術は他業種と同様ものづくりに関しては高度な技術力を有しており、これらの技術をいかに伝承していくかが、重要な問題のひとつです。ここ数年コンピューターやインターネットが爆発的に普及し、建設業においても情報化やマニュアル化が進みつつあります。しかし、マニュアルでは人が長年培った経験によって得られる現場技術やノウハウを伝承することは不可能であり、昔の伝統技術のように現場技術やノウハウは人から人へ直接伝えるものであります。そのため、先人達の教えをしっかりと受け継ぎ、さらなる経験を積んで、後輩に伝えていくことが私たちの役割ではないかと思います。さらに、地球環境問題等建設業を取り巻く環境が日増しに厳しくなっているため、今までにない新たな試みや新しい技術の開発にも積極的に取り組んでいかなければならぬ。

第二には、IT技術の有効利用です。ここ2~3年の間にIT革命が急激に進歩しています。しかし、現場でのIT活用としては電子情報のやり取りや必要な情報検索といったツールとしての活用の域にとどまっているのが実情であります。年代的にはITの進歩に取り残されそうな年代ですが、情報リテラシーを高め、IT技術を施工技術に反映させていく技術革新に取り組まなければならない。

第三には、新たな能力の習得です。21世紀に入り、日本の社会は確実に少子・高齢化社会に向かって進んでいます。国家財政が縮小され、公共事業が削減される中、社会資本の整備のあり方も変化しつつあります。すなわち、限られた資源を有効に投資する方法や行政主導ではなく、住民のニーズに即した社会資本の整備のあり方が求められてきています。そのため、これから建設業はさらに専門性を極めた上で、単にものをつくる請負だけではなく、人に快適な空間を提供し、新しいライフスタイルを提案できる新たな能力が必要となるのではないかと思います。

今年に入り、他社の職員がリストラで会社を辞めていきました。この先も不透明で、厳しい時代が続くと思いますが、一層の自己啓発に努め、この未曾有の難局を乗り切り、新しい道を切り拓いていきたいものです。

卒業10年を迎えて

小野 潔 (C92)

「光陰矢のごとし」とはよくいったもので、あっという間に大学を卒業して10年という年月が過ぎてしまった気がします。振り返ってみると、大学院修了後、建設省(現 国土交通省)に入省し、1年目に本省道路局、2年目に北陸地方建設局(現 北陸地方整備局)黒部工事事務所、3年目に本省大臣官房(併任 総理府国際平和協力本部事務局)、5年目に土木研究所(現 国土技術政策総合研究所)橋梁研究室、7年目に現在の大坂大学大学院と、ほぼ1年もしくは2年といった短い期間で異動を繰り返してきたことになります。その間に、兵庫県南部地震への対応、水害への対応、ゴラン高原における日本のPKO活動支援のための約3ヶ月に渡るイスラエルでの生活、道路橋示方書の改訂作業等、学生時代までは考えられなかつた非常に多くのことを経験してきました。それらの中には困難なものも少なからずありましたが、今考えてみると、当然のことかもしれませんのが自分にとって非常によい経験になったと思います。また、仕事を通じて多くの人と知り合え、そのことは私に取って貴重な財産となっています。

ところで、卒業10年ということで、正式な10年会より一足早く6月に有志で伊勢志摩に集まって同窓会を行いました。北海道や九州等、遠くから参加してくれた人もいた関係で約20人近くが集まり、学生時代や近況に関する話、はたまた久しぶりの同期との麻雀等で盛り上がり、夜遅く(朝?)まで楽しい時間を過ごしました。私達の学年は土木外就職をした人が多く、当時の先生方に心配をおかけしたという話をよく耳にします。しかし、同窓会で久しぶりにあって話をしてみると、皆それが苦労しながらも自分の置かれた状況で一生懸命がんばっていることが強く感じられ、うれしく思うとともに、頼もしくさえ感じられました。

今、社会は大きな変革の時期であるように思われ、土木の関連業界にはどちらかというと逆風が吹いているように感じられます。また、国立大学についても独立行政法人化が間近に迫っています。しかし、社会がどのように変わって行こうとも、社会が必要とする事業、研究等は必ず存在すると思いますので、風説に迷わされることなく、社会がより良い方向に向かっていくよう、微力ながら自分なりに貢献できればと考えております。

最後に同期をはじめ、構築会会員の皆様の益々のご活躍を祈って結びといたします。

大阪支部だより

大阪支部では、平成14年9月10日に講演会・見学会、総会及び懇談会を行いました。

今年度は、来年3月に大阪・京都・滋賀で第3回世界水フォーラムが開催されることもあり、世界水フォーラムをテーマにしました。

講演会は、世界水フォーラム事務局長の尾田栄章氏をお招きし、「第3回水フォーラムに向けて」と題した講演を頂きました。

また、引き続いての見学会では、「水都大阪のロマンを巡る船旅」として、堂島川から東横堀川、道頓堀川と1時間半の川巡りを行いました。水上から眺める大阪のまちもなかなかのもので、会員の皆さんも水都大阪のロマンを少しでも感じていただけたと思います。

第3回世界水フォーラムの開催まであと半年、地元大阪で行われるビッグイベントですから、構築会の皆さんも何らかのかたちで御参加いただければ幸いです。

平成14年度の大阪支部役員を紹介させていただきます。

支 部 長 辻 征 雄 (C65)

副支部長 河上 隆志 (A69)

野口 惠司 (C71)

監事福來知自 (A72)

中村 順行 (C74)

幹事長 辰谷 義明 (C80)

幹事 森崎 論志 (A75)

日野 繁 (C78)

榎原 節明 (C78)

鈴木 宏彰 (C82)

山中俊夫 (A82)

鳥牧 昭夫 (C86)

小池 重一 (C88)

椎名 辰之 (A88)

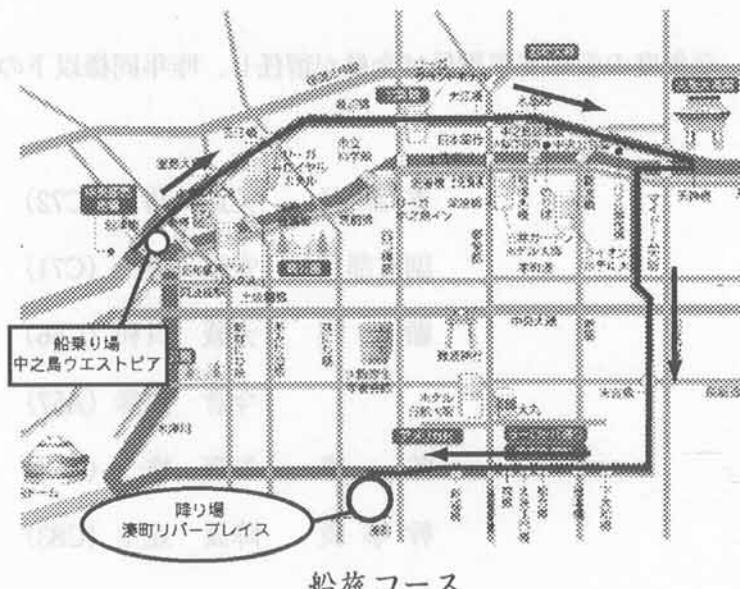
鍋島 康之 (C88)

松並 正 (C91)

古澤 智昭 (A95)

～過去から現代へ～

太閤秀吉の昔から物資を運ぶルートとして、大阪の経済を支えてきた川・・・3世紀半の永きに亘り多くの人に親しまれ愛されてきた大阪の川や橋を巡りながら、大阪の歴史と文化を再発見して下さい。1時間半の川廻りの終着は、未来大阪の新都心、ルネッサンスなんばです！



大阪支部の皆さん、本年度は、このメンバーで支部運営を行っています。今後とも見学会・総会・懇親会等への参加をご参加をお待ちしておりますので、気楽に来て頂きますようお願いいたします。

愛知支部だより

東海三県といわれる愛知県、岐阜県、三重県は現在たいへんにぎやかに動いています。

まず、2005年に開港を予定している中部新国際空港は現在工事の最盛期を迎えています。関西新空港に負けず劣らぬ良い空港とするべく、産官学の力を合わせてがんばっています。またそこにある交通アクセスについても急ピッチで工事が進んでいます。

さらに2005年には愛知万国博覧会が開催される予定です。現在は、環境との共生を第一に考え、会場の設定や、コンセプト作りの動きがあわただしく行われています。工事の最盛期は、来年以降となります、開催の暁には多くの方に喜んでいただけるイベントにしたいと思いながら準備をすすめているところです。

さらに、これらの動きにあわせて、第2東名・名神自動車道の建設も着実に行われています。

さて、構築会愛知支部の活動について報告いたします。さる2001年5月19日と10月20日の2回、桑名国際ゴルフ倶楽部にて親睦ゴルフ大会を開催しました。少人数ながら、たいへん和やかな雰囲気で行われました。

今年度の愛知支部役員は全員が留任し、昨年同様以下のとおりです。

支 部 長 英比 勝正 (C72)

副支部長 安原 良一 (C71)

顧 問 大藪 貞利 (C56)

今倉 邦彦 (A57)

監 事 矢野 修一 (C74)

幹 事 長 降旗 達生 (C83)

(C70) 朝井 一郎 桑田 支

(S70) 吉川 未来 幸一 謙

(T70) 佐藤 伸中 伸一

(U70) 伊武 各郷 長平 伸

(V70) 関口 伸口 伸一

(W70) 朝倉 朝倉 伸一

(X70) 木村 伸一

(Y70) 中山 伸一

(Z70) 大庭 伸一

(AA70) 今宿 伸一

(AB70) 斎藤 伸一

(AC70) 一重 伸一

(AD70) 佐藤 伸一

(AE70) 木暮 伸一

(AF70) 本東 伸一

(AG70) 久 伸一

(AH70) 並木 伸一

(AI70) 朝倉 伸一

(AJ70) 朝倉 伸一

本年度は、さらに活発に活動したいと考えています。

東海地方にご異動の際には是非お仲間に加わっていただきたいと思います。

【幹事長 降旗 達生 (C83) 記】

東京支部だより

東京支部では、毎年7月に総会・懇親会を開催しています。さらに隔年ごとに講演会を併催しています。平成14年度は、7月10日に講演会と第16回総会・懇親会を開催しました。

当日は台風が東海沖を東進した影響で大荒れの天候で、来賓予定の土木工学専攻長の松井保教授と構築会会长の山村勝保様が止むを得ず欠席され、松井教授の講演も中止となりました。それにもかかわらず、来賓で建築工学専攻長の大野義照教授の講演会「コンクリート構造物の長寿命化」に50名、総会・懇親会にも70名以上と例年同様多数の方々に参加いただくことができ、おおいに懇親を深めることができました。

総会では平成13年度の活動報告と平成14年度の活動計画が承認されたほか、支部幹事長の交代(井澤衛：CM79→大田哲也：C83)が行われたことをここに報告いたします。

〔追伸〕

①松井教授からは「新幹線が不通で、空港でぎりぎりまでチャレンジしたが行けなかった。講演の内容はどちらかの機会があれば是非お話したい。皆様によろしく」旨の連絡をいただきました。また懇親会の後に二次会までお付合いいただいた大野教授からも、「翌日、無事帰阪しました。皆様の活躍を期待しています。」旨の連絡をいただきました。

②東京支部では、連絡手続き合理化などのため、会員の皆様の連絡先のmailアドレスのデータベース化を図っています。平成14年度の支部総会案内への返信にアドレスを記入いただいた方から登録を始めています。未登録の方は、是非東京支部幹事長宛て(otatet@kajima.com)にアドレスの連絡をお願いいたします。



大野教授の講演



講演会 会場風景

兵庫支部だより

幹事長の「告白的」支部活動報告

平成13年度は、幹事長の負担を軽減してやろうという役員ご一同様の暖かいご配慮もあって、見学会と総会と懇親会を10月19日の金曜日の午後に半日ですませました。

見学会は、神戸東部新都心(HAT神戸)に建設中だった兵庫県立新美術館「芸術の館」でした。安藤忠雄さん設計の超近代的かつ機能的な建物は、免震構造など美術品を保管するための最新の技術や、自由に仕切れる展示ルームや、どこから展示品を入れるかわからない陳列ケースや、凝った螺旋階段や、EPS工法による盛土など建物自体がショーケースという感じでした。3時間歩きっぱなしだったのに、すぐに時間がたってしまいました。しかし、ちょっと疲れました。開館前で無用のキズや汚れをつけるわきにはいきませんので、参加者は全員、上履き持参でした。

開館前の見学といえば、施主や施工業者さんに多大なご無理をお願いするのがつきもの。今回は、兵庫県県土整備部の泉さんと松原さん、大林組の秋川さんをはじめとする現場の方々に過分のお世話になりました。全員のヘルメットの用意や資料の作成、また電気設備の取り計らいなど、きめこまかなお心遣いをいただきました。これらの方々はもちろん、建築や土木の専門家でしたので、当方のニーズにぴったりの案内をしていただきました。

総会は、この美術館の中のホールを一時的にお借りして行いました。参加者は42名で、12年度の報告・決算、13年度の予定・予算及び役員改選などを行いました。

午後の1時30分からの行動で、総会が終わる頃にはみんな、のどが渴いていました。午後5時過ぎから、待ちきれない雰囲気の中で近くのレストランで懇親会を始めました。松井保土木工学専攻長、橋英三郎建築工学専攻長、松尾純構築会会长長も駆けつけていただき、にぎやかに懇親いたしました。例年、座敷で会席料理でしたが、今回は立食形式で料理もまますますでした。ここまで幹事長としては完璧な運営だと思っていたのに、失敗に気がつきました。出席者の名札を作るのを忘れていたのです。少しは顔なじみですから、みなさん、そんなに支障はないようでしたが、しかし、懇親会に名札は必需品で、次回は気をつけるようにとある幹事の方からご注意もいただいた次第です。

支部の活動報告は以上ですが、平成14年度はこういう節約・省エネ型のイベントは許してもらえない幹事長は腹をくくっております。どんなにあったか、いや、どんな活動をしたか、来年の兵庫支部だよりを楽しみにしていただきますよう。

支 部 長	岸田 威 (C66)			
副支部長	西田 泰悟 (A68)			
監 事	佐俣 千載 (C71)	橋本 彰 (A72)		
顧 問	松浦 勢一 (C53)	王 柏群 (A54)	木村 公之 (A59)	
	入江 恒一 (A62)	神田 徹 (C63)	明渡 稔輔 (C65)	
相 談 役	川谷 充郎 (C72)	道奥 康治 (C77)		
幹 事 長	本井 敏雄 (C75)			
幹 事	亀本 博文 (C65)	山口 征宏 (C69)	志波 秀明 (C71)	
	渡辺 哲男 (C71)	川谷 充郎 (C72)	中山 久憲 (C73)	
	泉 純一 (A76)	榎原 敏夫 (C77)	道奥 康治 (C77)	
	金川 裕一 (A78)	園田 学 (A78)	大原 良夫 (C79)	
	桜井 秀憲 (C80)	富岡 洋 (A80)	田谷 孝壽 (A83)	
	松井三思呂 (C84)	秋川 宏之 (A88)		

【幹事長 本 井 敏 雄 (C75) 記】

広島支部だより

構築会広島支部は1999年5月に発足し、今年で4年目を迎えました。

今年度は、支部長及び幹事長の退職、退任に伴い支部役員の入れ替えを行いました。

13年度は、講演会、見学会等の予定をしておりましたが、会員の都合が合わず実施することができませんでしたので、例年行われている広島支部総会と懇親会のみの実施となり、総会において新役員の承認が行われました。

今年度は母校の先生をお迎えした講演会・見学会を是非開催していきたいと考えておりますので、何卒宜しくお願いします。

折から建設業界には厳しい時代が続いており、さらに建築・土木のボーダレス時代が到来しつつありますが、会員相互の情報交換・技術交換の場ともなる構築会を活発に活用していきたいと思います。

小さい所帯の広島支部ですが、懇親ゴルフ等も企画し、もっと気軽に会員が集い親睦を深めていきたいと思っています。ご協力をお願いします。

最後になりましたが、他地区より広島地区に転入された方がおられましたら、広島支部役員までご連絡頂けますようお願い致します。

支 部 長 中山 隆弘 (C68)

副支 部 長 芥川 省三 (C74)

幹 事 長 増田伊知郎 (C80)

監 事 坂手 道明 (C71)

幹 事 会 蒲原 幹生 (C87)

亀田 陽市 (C90)

南 博高 (C95)

小西 英明 (C95)

久保 充司 (C98)

2002年度役員会報告

日 時 : 2002年5月23日(木) 18:00~18:45

場 所 : 大阪府建築健保会館

協議内容 :

1. 2001年度事業報告

(1) 役員会の開催、(2) たよりの発行、(3) 記念品贈呈、(4) 支部活動への補助、(5) 各専攻への事業補助、などの本部活動報告、および愛知、大阪、東京、兵庫、広島の各支部活動の報告がなされ、審議の結果すべて承認された。

2. 2001年度会計報告

担当幹事より、収入・支出状況の説明と監査結果の報告がなされ、承認された。

3. ホームページの開設

2002年度「構築会だより」の中の「事務局だより」にて、URLアドレスなど運用上の情報を会員に周知することが承認された。

4. 幹事の体制

構築会会則では、「幹事は土木工学専攻および建築工学専攻の教官から2名ずつ選出し、うち1名は幹事長を兼ねる。」となっている。すなわち幹事数は4であるが、名簿の各年発行化にともない幹事長任期を2年にしたこと(2001年度役員会報告)などから、幹事数を3とする方が作業のローテーションを都合よく組める旨の提案が、旧幹事団からなされた。それを受け、2002年度の作業を3名の幹事で試行し、差し障りないことを確認した上で来年度の役員会で幹事数を3名とするべく会則変更を協議することが了承された。

5. 2002年度役員選出

新役員に、山村勝保会長、前田孝男副会長、小田和広監事、松塚充弘監事、向井洋一幹事、2002年卒の学年委員として竹口直樹氏、山本訓久氏がそれぞれ選出され、また、多田元英幹事長と松村暢彦幹事の留任が了承された。

6. 2002年度事業計画案および予算案

新幹事より2002年度の事業計画案と予算案が提示され、審議の結果、原案どおり承認された。

2001年度会計報告

(平成13年4月21日～平成14年4月30日)

< 収入の部 >

	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度
会 費	6,489,500	6,826,800	8,182,500	5,949,500	6,419,300	6,354,270
広 告 料	1,837,837	1,778,270	1,140,000	1,660,000	1,160,000	559,160
利 息	4,636	7,476	3,032	1,974	1,960	1,437,089
寄 付 金 他	0	162,561	0	0	0	0
単 年 度 小 計	8,331,973	8,775,107	9,325,532	7,611,474	7,581,260	8,350,519
年 度 繼 越	7,398,949	7,029,955	6,732,258	7,586,460	6,991,873	6,730,119
収 入 計	15,730,922	15,805,062	16,057,790	15,197,934	14,573,133	15,080,638

< 支出の部 >

	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度
名簿印刷費	4,378,015	4,006,118	3,819,400	4,690,713	4,255,587	2,384,130
郵便通信費	1,204,896	1,159,530	1,093,600	131,052	239,074	143,263
支部援助金	1,481,350	1,498,000	1,543,000	1,584,500	1,577,300	1,658,300
教室寄付金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
会合費	228,470	152,978	171,880	159,590	193,312	83,795
総会開催費	0	0	0	0	0	579,503
謝金	413,000	486,500	334,500	322,000	327,000	390,000
記念品代	0	271,845	286,125	197,925	275,100	246,780
出張費	26,960	398,860	39,860	58,860	59,760	59,760
振替手数料	95,045	109,880	139,955	114,750	109,651	11,130
慶弔弔費	62,960	25,125	76,840	130,530	580	95,602
消耗品費	10,271	22,968	420	13,141	5,650	13,651
備品	0	0	0	0	0	0
会費滞納分督促費	0	0	165,750	0	0	102,115
その他の	0	500,000	0	3,000	0	0
支出計	8,700,967	9,072,804	8,471,330	8,206,061	7,843,014	6,568,029

	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度
残高	7,029,955	6,732,258	7,586,460	6,991,873	6,730,119	8,512,609

< 繰越金内訳 >

	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度
定期貯金	5,800,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000	5,200,000
郵便為替	429,100	0	762,770	483,660	83,750	503,140
郵便貯金	385,206	2,141,121	1,640,752	1,850,969	634,774	2,126,325
銀行預金	262,030	648,407	1,318,471	848,228	1,992,177	631,755
現金	153,619	143,735	64,467	9,016	219,418	51,389
合計	7,029,955	6,733,263	7,586,460	6,991,873	6,730,119	8,512,609

2002年度構築会事業計画

事業項目	実施時期
1. 会員名簿の発行・配布	2002年10月頃
2. 「構築会だより」の発行・配布	2002年10月頃
3. 記念品の贈呈 (男性: タイピン、女性: ネックレス)	
卒業者、新規修了者	2003年3月
卒業10周年、30周年の会員	随時
4. 支部活動への補助 支部活動への補助金交付	随時
5. 土木、建築工学専攻への事業補助	随時
6. 役員会の開催	2002年5月23日
7. 「構築会を考える会」の開催	随時

2002年度構築会予算

収入の部		支出の部			
項目	金額	2001年度実績	項目	金額	2001年度実績
1. 会費	6,400,000	6,354,270	1. 名簿・会報等発行・配布費	4,480,000	2,917,393
2. 広告料	1,160,000	559,160	名簿印刷費	4,000,000	2,384,130
3. 利息	2,000	1,437,089	郵便通信費	150,000	143,263
4. 寄付金 他	0	0	謝金	330,000	390,000
1~4 小計	7,562,000	8,350,519	2. 記念品費	250,000	246,780
5. 前年度繰越金	8,512,609	6,730,119	3. 補助金	2,400,000	2,458,300
			支部援助金	1,600,000	1,658,300
			教室寄付金	800,000	800,000
			4. 行事・運営費	310,000	818,660
			行事費	0	579,503
			会合費	200,000	83,795
			出張費	60,000	59,760
			慶弔費	50,000	95,602
			5. 事務費	120,000	126,896
			備品費	0	0
			消耗品費	20,000	13,651
			振替手数料	100,000	11,130
			会費滞納分催促費等	0	102,115
			1~5 小計	7,560,000	6,568,029
合計	16,074,609	15,080,638	6. 予備費	8,514,609	8,512,609
			合計	16,074,609	15,080,638

会員の皆様には、平素から会の運営と発展にひとかたならぬご支援を賜り、事務局一同心よりお礼申しあげます。さて、構築会の事務活動などに関して以下に報告いたします。

1. 名簿の隔年発行

2001年度の役員会において名簿を隔年に発行することが認められたことを受け、昨年度は「構築会だより」だけを発行いたしました。会員の皆様に不自由を強いましたが、概ねご理解を賜りありがとうございました。今年度は従来どおりに「名簿」と「たより」の両方を発行いたします。どうぞご利用のほどをお願いいたします。

2. 財政について

会費の高額滞納者に対し「会員名簿」と「構築会だより」の発送を停止することが2000年度の役員会で議決され、それを受け昨年度は268名の会員への「構築会だより」の発送をやむなく停止しました。今年度の発送停止者数も同程度になると考えられます。会則の「会員の親睦を計ることを目的とする」という本会の活動目的にご理解を賜り、財政面でもご協力いただければ幸いに存じます。

3. ホームページの開設

2002年度より、事務局で作成しました構築会のホームページの電子情報を土木工学専攻・建築工学専攻の各管轄のWebサーバー上に転載することが、両専攻のご好意により正式に承認されました。これに伴い、以下のURLより構築会のホームページの内容が閲覧できるようになります。現在のホームページは、「構築会だより」の電子版としての運用ですが、今後は会員の皆様のご要望に添えるようなメニューの追加の可能性も検討してまいりたいと考えております。是非、構築会のホームページを御覧いただき多くのご意見を賜りたくお願い申し上げます。

<http://www.civil.eng.osaka-u.ac.jp/kouchiku/>

または

<http://www.arch.eng.osaka-u.ac.jp/kouchiku/>

【2002年度幹事長 多田元英 (A80) 記】

